様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０３１３

研究課題名（和文）『ドラキュラ』と心霊主義・心霊研究に関する新歴史主義的研究

研究課題名（英文）A New Historical Approach to Dracula and Spiritualism/Psychical Research

研究代表者
丹治　愛（TANJI, Ai）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：９０１３３６８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究をとおしてわたしは、19世紀後半から20世紀前半にかけてのイギリス小説に頻出する心霊現象のモチーフ（死者の霊との交信、幽霊現象、テレパシー、千里眼、読心術、催眠術など）に着目しながら、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』を同時代の心霊主義と心霊研究との学際的関連のなかで読解した。
　また、超自然的なものに対するこの時代の態度を、心霊主義、心霊研究、科学的自然主義という三つの側面から総合的に研究し、心霊現象がこの時代にもっていた思想的意味を確認するとともに、最終的に『ドラキュラ』に関する新しい解釈を提示しようとした。

研究成果の概要（英文）：　In this research, while taking notice of such motifs related with spiritualism and psychical research as communication with the spirits of dead people, ghosts, telepathy, clairvoyance, mind-reading, hypnotism, in British novels from late 19th and early 20th century, I read Bram Stoker's Dracula in the interdisciplinary context with spiritualism and psychical research.
　Also, while studying the mental attitudes toward the supernatural by classifying them into spiritualism, psychical research and scientific naturalism, and defining the ideological significance of the spiritual phenomena in this period, I attempted some new interpretations of Dracula.

研究分野：英米文学

キーワード：『ドラキュラ』　ブラム・ストーカー　心霊主義　心霊研究　幽霊　催眠術　ヒステリー　テレパシー

１．研究開始当初の背景

ヴィクトリア朝、とくに 19 世紀後半のイギリスは、ダーウィンの進化論、およびその本質的特徴をなしていた科学的自然主義（scientific naturalism）的世界観――神という超自然的要素の排除――が着実に拡大していく時代だった。そしてそれにともない、さまざまな科学・疑似科学が登場してくる。たとえば性科学、心理学、進化主義的文化人類学、優生学、骨相学、頭蓋計測学、生体解剖学などであるが、それらがダーウィニズムおよび科学的自然主義となんらかの連携関係をもっていることは、いまさら言うまでもない。

その一方で、この時代は、科学的自然主義の拡大に対する反発から、死後も実在しつづける霊の存在、そしてそのような霊との交信の可能性だけでなく、その他の心霊現象全般（幽霊現象、テレパシー、千里眼、読心術、催眠術など）に対する信仰としての心霊主義（spiritualism）への関心が未曾有の高まりをみせた。

科学的自然主義は、当然のごとく心霊現象をたんなる心理的現象（「無意識的大脳作用」）に還元し、心理学を発展させることによって、心霊現象の実在性を否認することに躍起になるが、他方、それらの反科学的・反自然主義的な現象を、なんらの先入観なく中立的な立場から厳密な科学的方法論によって研究しようとする心霊研究（psychical research）も出現し、1880 年代になると、英米それぞれに心霊研究協会が創設され、イギリスの協会にはのちの総理大臣、のちのノーベル賞受賞者をふくむ多くの知識人、文学者、科学者がそのメンバーとして名を連ねることになる。

心霊主義と心霊研究をめぐる研究は、Janet Oppenheim の The Other World (1985) 以降、主に文化史や思想史、宗教学などの立場からなされてきた。それに連動するかたちで、2000 年以降、心霊主義と心霊研究の重要な資料が陸続と公刊されてきている。たとえば、5 巻からなる、*Spiritualism, Mesmerism and the Occult* シリーズ（Pickering and Chatto, 2012）。ケンブリッジ大学出版局も、*Cambridge Library Collection - Spiritualism and Esoteric Knowledge* というシリーズを出しはじめている。心霊主義の資料はかなりの部分が大衆レベルのものであるので、それらのものもふくめて十分な一次資料がすべて日本で読めるようになったとまでは言えないが、研究環境が整ってきたということは間違いがない事実だろう。

また、2000 年以降のもうひとつの注目すべき傾向は、Pamela Thurschwell, *Literature, Technology and Magical Thinking, 1880-1920* (2001), Roger Luckhurst, *The Invention of Telepathy* (2002), Nicola Brown, *The Victorian Supernatural* (2004) のように、「心霊的なもの」という主題が文学的にも豊かな鉱脈をもっていることを証明した興味深い研究書が陸続と出されるようになったことである。心霊主義・心霊研究をめぐる研究が、文学作品を参考資料としてあつかうだけの文化研究から、文学作品を一個の全体性として解釈する文学研究へと深化し、文学と心霊主義・心霊研究との関係がますます興味深いものとなってきているのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての英米文学（Henry James, Mark Twain, Conan Doyle, H. G. Wells, Rudyard Kipling, etc）に頻出する心霊現象のモチーフ（死者の霊との交信、幽霊現象、テレパシー、千里眼、読心術、催眠術など）に着目しながら、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』を同時代の心霊主義と心霊研究との学際的関連のなかで読解することにある。また、超自然的なものに対するこの時代の態度を、心霊主義、心霊研究、科学的自然主義という三つの側面から総合的に研究し、心霊現象がこの時代にもっていた思想的意味を確認したうえで、最終的に『ドラキュラ』に関する新しい解釈を呈示する文学研究たることにある。

具体的な主題は以下のとおりである。

(1)『ドラキュラ』における幽霊現象（霊の物質化）

(2)『ドラキュラ』における催眠術とヒステリー（精神の身体化）

(3)『ドラキュラ』におけるテレパシーと千里眼（心霊主義とテクノロジー）

３．研究の方法

(1) 近年、心霊主義・心霊研究に関する入手可能な一次資料が圧倒的に増えているので、さまざまな方法で（購入、内外の図書館での複写、電子テクストのダウンロードなど）それらをできるだけ収集する。

(2) それらの一次資料と『ドラキュラ』のテクストをインターテクスチュアルに関連させた新歴史主義的アプローチによって、新しい『ドラキュラ』解釈を呈示する。

４．研究成果

資料収集の面では、アメリカのコロンビア大学図書館において、心霊研究関連のジャーナルとは異なって、日本では発見できなかった心霊主義関連のジャーナル（Light, Zoist, Borderland など）を収集できた。その他、ストーカーが『ドラキュラ』執筆過程で作成していた執筆ノートの写しも閲覧することができた。ともに貴重な資料であることが確認された。具体的な研究主題については、ほぼ予定どおりの方向にそって進めることができた。以下のとおりである。

(1)『ドラキュラ』における幽霊現象（霊の

物質化）の実在の証明と見なし、夥しい数の幽霊体験を収集した。一方で、科学的自然主義は、幽霊を主観的幻影と解釈し、それを「無意識的大脳作用」という心理学的レベルに還元しようとする。心霊主義・心霊研究的な幽霊テクスト、およびヘンリー・ジェイムズの『ねじの回転』など、ヴィクトリア朝後期の幽霊物語とも関連させながら、『ドラキュラ』を心霊研究的な幽霊物語のひとつとして解釈した。

(2)『ドラキュラ』における催眠術とヒステリー（精神の身体化）

心霊主義は催眠術もヒステリーも、身体からの霊の離脱（幽体離脱）の例と見なした。一方で、世紀末の心理学は、催眠術を人工的に引き起こされたヒステリーと見なすとともに、ヒステリーを精神の身体化として解釈し（たとえばフロイトは、ヒステリーを、「抑圧された」精神的外傷が身体的症状をともなって回帰してきたもの（「抑圧されたものの回帰」）と定義している）、また、催眠術をその診断法ならびに治療法として科学的研究の対象としていた。フロイトの「ヒステリー現象の心的メカニズムについて」（1893）を知っていた可能性を指摘されているストーカーは（Nina Auerbach, *Our Vampires, Ourselves* [1995]）、ドラキュラの被害者となった女性の症状を、あたかもヒステリーの症状であるかのように、そして催眠術を施された彼女を霊（幽霊）と通信する霊媒であるかのように描写している。同時代のヒステリーと催眠術のテクストを『ドラキュラ』と関連づけることによって、その描写の意味をさぐった。

(3)『ドラキュラ』におけるテレパシーと千里眼（心霊主義とテクノロジー）

『ドラキュラ』は科学と魔術が並存するテクストである。そのなかで、テレパシーと千里眼のような心霊主義的能力は、「無線」や「電話」のような新しいテクノロジーと重なりあう。これは、キプリングが「無線（Wireless）」のなかであつかったのと同じ主題であると同時に、心霊現象を認めない現代の不完全な唯物論的科学に代わる「新しい科学」の可能性を模索する、アルフレッド・ラッセル・ウォレス（進化論の共同提唱者）のような心霊研究者のテクストをも想起させるだろう。『ドラキュラ』における心霊主義とテクノロジーの問題を、魔術から科学へという歴史観をもつ進化主義的文化人類学と関連させながら検討した。

要約的にいえば、超自然的現象を肯定的に信じ、キリスト教衰退の気配のなかオカルト的な関心を集めることに成功していた心霊主義と、超自然的現象を否定し、唯物論的な傾向を強化していた科学的自然主義という二つの対照的な世界観のあいだで、超自然的現象を「偏見なく」科学的方法によって研究しようとする心霊研究は、その二つの世界観のあいだで揺れていた後期ヴィクトリア朝、とくに世紀末の精神的傾向を典型的に示している運動だったと言えるだろう。そのなかには、超自然的現象に否定的な結論に達する者もいる一方で、それを肯定することによって唯物論的傾向を強めていた当時の科学にかわる「新しい科学」の可能性を夢見ようとする者もいた。

そして『ドラキュラ』という作品は、そのような心霊研究的テクストとのインターテクスチュアリティを明確に示しているテクストであると言えるだろう。わたしは、以上にあげた三つの観点からそれを論証できたと考えている。

それと同時に、本研究においては、ストーカー以外の世紀末作家についても、同様な観点からながめた。たとえばコナン・ドイルの心霊主義的信仰とシャーロック・ホームズの科学的合理主義との関係である。後者の科学的合理主義については、ホームズの推理法を具体的に追跡し、それがいかに当時の新しい科学的方法と連動しているかを確認し、そのうえでドイルが第一次大戦中に書いた、『新しい啓示（*The New Revelation*）』にはじまる何冊かの心霊主義的作品を読解し、そのうえで科学的信念から心霊主義的信仰への移行の思想的意味を、1926年に公刊された『霧の国（*The Land of Mist*）』をとおして考察した。

今後は、ストーカーやドイルやH.G.ウェルズやジョージ・マクドナルドといった大衆小説的ジャンル（ホラー、ミステリー、SF、ファンタジー）で心霊現象をあつかった作家とは異なる、ヘンリー・ジェイムズやトマス・ハーディのようないわば本格的な作家と文学史的に評価されている世紀末作家の作品のなかにある心霊主義・心霊研究的現象をも視野におさめながら、研究を深化・拡大させていきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５件）

① 丹治愛「ウィリアム・モリス『ユートピアだより』　ナショナル・ヘリテージとしてのイングランドの田園」、査読有、『英文学研究　支部統合号』第９号、日本英文学会、2017年１月、pp. 33-40(99-106).

② 丹治愛「ハーディと田園主義的イングリッシュネス　その概念の構築と脱構築」、査読有、『ハーディ研究』第42号、日本ハーディ協会、2016年９月、pp. 1-20.

③ 丹治愛「フォースター『モーリス』の文化研究　同性愛とイングリッシュネス」、査読有、『ヴィクトリア朝文化研究』第

13号、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、2015年11月、pp．73-101．

④ 丹治愛「ナショナル・アイデンティティの変遷　オースティンとフォースターのあいだで」、査読有『ギャスケル論集』第25号、日本ギャスケル協会、2015年8月、pp．1-30．

⑤ 丹治愛「モダニズムにおけるジャンル横断的詩学　ヴァージニア・ウルフ『波』における小説と詩（2）」、査読有『英文學誌』第56号、法政大学英文学会、2014年3月、pp．19-37．

〔学会発表〕（計　4件）

① 丹治愛「『幕間』における田園主義的イングリッシュネス　ナショナリズムと戦争」（日本ヴァージニア・ウルフ協会第36回全国大会招待講演）、2016年10月29日（土）京都女子大学（京都府京都市）

② 丹治愛「トマス・ハーディとイングリッシュネス　牧歌とダーウィニズム的自然観」（日本ハーディ協会第57回大会招待講演）、2015年11月28日（土）戸板女子短期大学（東京都港区）

③ 丹治愛「E．M．フォースター『モーリス』と緑林　イングリッシュネスと同性愛」（日本ヴィクトリア朝文化研究学会第14回全国大会招待講演）、2014年11月8日（土）上智大学（東京都千代田区）

④ 丹治愛「ナショナル・アイデンティティの変遷――オースティンとフォースターのあいだで」（日本ギャスケル協会第26回大会招待講演）、2014年10月4日（土）明治大学（東京都千代田区）

〔図書〕（計　4件）

① 丹治愛（共著）『文学批評への招待』丹治愛、山田広昭編、放送大学教育振興会、2018年3月（予定）、「はじめに」「1．文学批評とはどのような行為か――本科目のねらい」「10．マルクス主義批評」、「11．フェミニズム批評（1）――家父長制的イデオロギーの暴露」「12．フェミニズム批評(2)――ガイノクリティシズム」「15．まとめ――読むことをめぐって」、頁未定。

② 丹治愛（共著）『教室の英文学』日本英文学会（関東支部）編、研究社、2017年5月、320頁、「時代・社会を教える――イギリス「社会小説」と英文学教育」、pp．108-114。

③ 丹治愛（共著）『ロマン主義エコロジーの詩学　環境感受性の芽生えと展開』小口一郎編、音羽書房鶴見書店、2015年11月、298頁、「イギリス小説史のなかの動物文学」、pp．159-180．

④ 丹治愛（共著）『一九世紀「英国」小説の展開』海老根宏・高橋和久編、松柏社、2014年6月、457頁、「ジェイン・オースティンの風景論序説　ピクチャレスクからイングランド的風景へ」、pp．67-88．

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
丹治　愛（TANJI，Ai）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：９０１３３６８６